

## 英国アフリカ学会に出席して

— 1988年9月14～16日：ケンブリッジ大学

## ● 丹 埜 靖 子

英国アフリカ学会 (ASAUK) は 2 年に 1 度開かれるが、今年はシルバー・ジュビリー (25周年) ということで特別な総会となった。もともと英国には別に1901年創立のロイヤル・アフリカン・ソサエティがあり会員数もはるかに多いが、かなりの会員が重複している。

## 会議のテーマ

テーマのなかで特に重点が置かれたのは環境問題、飢餓問題、難民問題、債務問題で複数のパネルが設けられていた。筆者の出席したなかで「政治的コミュニケーションとサイド・メディア」パネルでは目玉と見られていた *African Confidential* 誌の執筆者 スティーヴン・エリス (Stephen Ellis) 氏が、「巷間情報：既製手段外のコミュニケーション」と題するペーパーの発表を予定していたが、アフリカで足止めを食ってしまったとのニュースを知らされ一同非常にがっかりした。後に入手したペーパーによるとアフリカのほとんどの国で人々に重用されている「口こみ文化」を取りあげ、公式情報との比較や政府批判的世論の醸成等に関するものになるはずであった。またケニアのマウマウ運動のパネルがそっくり中止されたことも、理由はわからぬが残念であった。これはケンブリッジ大学の今年の講座の一つでもあり期待されていたものだった。

環境破壊のパネルはジンバブエ、ガーナ、東アフリカ、シェラレオネの問題がそれぞれの国の人の口から語られた。環境破壊防止に対する施策は村人たちに見える形で利益が還元されるよう立てられなければ実効が上らないという指摘があった。南部アフリカの武闘化パネルでは南アフリカの白人アフリカーナの「黒人多数支配」に対する恐怖

心が何に基づき、いかに形成されてきたかを分析したペーパーで、その不合理とともに必然性をも理解する必要があるという話が迫力をもって語られた。

債務パネルでは冒頭からスーダンの「救いようのない」深刻な債務累積の報告で重苦しい雰囲気になった。途中コメンテーターとして発言したあるマーチャント・バンクのアフリカニストの経験談が会場の話題をさらった。債務交渉の行なわれるパリ・クラブはもとゲシュタポの本部が置かれていた所で、その一室で、途上国の元首がコの字型に居並んだ先進国の役人や銀行家の前で窮状を訴え「いい子にします」と頭を下げる図は象徴的だと述べ、「アフリカの債務問題など存在しない。あるのは世界経済構造問題だけだ」と断定した時は会場に大きな拍手が湧いた。重債務国を金利、ドル価格、一次産品価格、貿易構造の犠牲となり「出血多量で死にかけている人」にたとえた。さらに、そうした債務交渉の場で、途上国と先進国が全く異なる言葉で話しているため、アフリカのいい分をレーガノミクス語に「通訳」するのに莫大な時間を費やさねばならない。彼らに「共通語」をつくってやるのが学者たちの役割ではないか、と現場に携ったもののフラストレーションを語った。それはもう一歩アフリカ側へ踏みこんだアフリカ研究を示唆したものとも受け取れた。

## □ サッチャーリズムと英国のアフリカ研究 □

噂に聞くアメリカのアフリカ学会はこの何倍もの大きさでまず数で圧倒されるということだが、英国の場合はその家族的な雰囲気とともに、日本と比べてアフリカ人の参加者が多いことも特徴であろう。今年はとくに例年になく多いと聞いた。

これまでのアフリカ研究は旧宗主国や先進国、援助供与機関などによる後進地域研究の性格が強かったが、現在ではアフリカ研究はアフリカ本土へ移りつつあるとは誰もが感じていることであろう。そうした状況のなかで、英国のアフリカ研究は過去の膨大な資料と研究の蓄積を活用し、歴史に裏づけられた、息の長い研究が期待されるのではなかろうか。同時にさらに多くのアフリカ人研究者をとりこんだ研究が求められている。

この点に関連して、最初の夜の講演 J・フェージ (John Fage) 教授 (バーミンガム大学) の「第二次大戦後の英国アフリカ研究・個人的述懐」は興味深かった。現在英国のアフリカ研究ひいては地域研究の置かれている立場が厳しく、今は冬の時代を迎えていることをあらためて感じさせられた。戦後のアフリカ研究に大きな影響を与えた三つの報告書、Scarborough, Hayter, Parker 報告書に触れつつ、時代の要求と政府の政策がいかに英国のアフリカ研究を左右してきたかをたどった。

1960年代の活性期は独立ラッシュで植民地を失ったものの、新たに英国のアフリカ研究に求められている役割意識が高まった時代で、ASAUKもこの時に生まれた。しかし石油危機以降とくに80年代の危機はアフリカのみでなく英国のアフリカ研究の危機でもあった。サッチャー政権の学術研究予算カットは、地域研究、そのなかでも周辺地域であるアフリカ研究に痛手を与えた。多くのシニア研究者が定年前に大学を去っていったが、その補充はないか、よくてジュニア・スタッフが配された。ただしアフリカ研究への熱意がそれによって薄められたわけではなく、会員数もピーク時に近い440名を維持しているし、アフリカ研究を志す学生は増加傾向にあるという。最近のパーカー報告が、地域・言語研究は官民両サイドから需要が高まるだろうとの認識を再確認したため、地域研究に即して追加予算がつけられたのは多少明るい

ニュースであった。この講演はマイクの不調などにより遅れて、次の予定のAMAM PONDOグループの開演の時間がきてしまった。主催者側は寛大にも途中、希望者を退席させてくれたところ、若手グループが半数近く去ってしまった。古なじみが残された会場で、さらに親しい雰囲気の中で話が続けられた。

### アフリカの政治とアフリカ研究

2日目の夜はナイジェリア外務大臣ンワチュクウ (Nwachukwu) 元帥の講演でアフリカと英国の関係がテーマであった。元帥は英国のアフリカ政策の「二律背反性」を指摘し、南アフリカ制裁に反対するサッチャー政権をきびしく批判した時は会場から大きな拍手が湧いた。2晩続きでサッチャー政権は批判されたことになる。

第3日には全体会議ASAUKの総会と会長による講演“*Africa's Economic Future*”があったが残念ながら筆者は出席できなかった。全体会議のまとめはホッダー・ウィリアムズ (R. Hodder-Williams) 教授によっていずれロイヤル・アフリカン・ソサエティの機関誌 *African Affairs* に掲載されることである。会長講演もいずれしかるべき方法で発表されると聞いたが、一つ彼の話のなかで、これまでのアフリカの最大の問題は経済ということで議論・研究されてきたが、現時点では政治の領域が最も緊急性があるのではないかと主張されたと聞く。確かにロンドンにいてさまざまなアフリカ人の意見を聞くにつけ、一つの大きな問題が国内的にも対外的にも、政治の問題であることを感じている人が多いことを知った折柄、適切な指摘だと思う。パネルのテーマからは政治が欠如していたが、会議によって示された方向は「政治」を指しているようである。

(たんの・やすこ/海外派遣員, 在ロンドン)